東京新聞　２０１５年８月１９日掲載

B29のエンジンを展示…

日本を焼け野原にした米軍のB29爆撃機のエンジンが、東京都市大学・世田谷キャンパス（世田谷区）で保管・展示され、自動車の技術者を志す現代の学生たちの教材になっている。

大学の廊下に、そのエンジンは展示されている＝写真。一見「何だろう」と思わせる形。一般来訪者も見学できる。「主要部の70％」が残り製作当時を伝える大変まれなもの、との説明文が添えられている。

東京トリビア
TOKYO TRIVIA

東京都市大が技術の教材に

エンジンは太平洋戦争中の一九四五年春ごろ、横浜付近で撃墜された機体から、リヤカーで東京工業大（目黒区）のエンジン研究室に運び込まれた。

最新鋭の性能だったB29のエンジン。一機に四台搭載されていたが、この時の回収は二台。このうち一台は、当時東工大生で、後に東京都市大の前身の武蔵工業大で学長を務める古浜庄一氏（故人）らが分解して細部を調査した。

もう一台は東工大から武蔵工大に引き取られ、九五年から展示。それが今の東京都市大での展示だ。

エンジンはクライスラー社の製造。この技術が、戦後の航空機や自動車の進化につながったとされる。

東京都市大工学部の白木尚人教授（四七）は「当時の米国の力が分かる。高度な技術は平和な世の中のために用いられるべきだが、皮肉にも戦争によって進む面もある」と話す。大学の広報担当者も「米国やB29を礼賛する意図はない。あくまでも教材です」と説明している。

（松尾博史）

■この記事・写真等は中日新聞社東京本社の許諾を得て転載しています。
無断で複製等、著作権を侵害する一切の行為を禁止します。